

日本中國學會報 第69集 抜刷
2017年10月7日 発行

学 界 展 望 (哲学)

湯 浅 邦 弘
矢 羽 野 隆 男
佐 野 大 介
久 米 裕 子
横 久 保 義 洋
寺 門 日 出 男
藤 居 岳 人

学 界 展 望

● 哲 学

はじめに

『日本中国学会報』第69集の「学界展望」哲学部門は、前年度に引き続き、大阪大学大学院文学研究科中国哲学研究室が事務局となり、編集および執筆を担当した。まず、編集方針などを簡潔に記す。

- (1) 阪大中哲研究室関係者による分担執筆とした。分担は次の通り。

はじめに・総記・先秦・秦漢……湯浅邦弘（大阪大学）

魏晋南北朝・隋唐……矢羽野隆男（四天王寺大学）・佐野大介（大阪大学）

宋・金・元・明・清・近現代……久米裕子（京都産業大学）・横久保義洋（岐阜聖徳学園大学）

日本・琉球・朝鮮・書誌……寺門日出男（都留文科大学）・藤居岳人（阿南工業高等専門学校）

- (2) 2016年1月1日から12月31日までの間の奥付を持つ、日本国内で刊行された単行本（専門書・一般書、原書・翻訳書等の別を問わない）を対象とした。

- (3) 記載の方法などについては、分担者の意向を尊重しつつ、全体のとりまとめを湯浅が行った。またその後、本学会出版委員会での検討を経た。

- (4) 「文献目録」については、「単行本」と「論文等」とに分け、それぞれ分類に従って作成し、本学会ホームページおよび阪大中哲研究室ホームページ上に掲載した。個別データの収集および目録作成に当たっては、阪大中哲研究室の中村未来研究員、梶島雅弘・佐藤由隆・中村成美院生の協力を得た。（湯浅邦弘）

一、総記・先秦・秦漢

まず、共同研究の重厚な成果としての刊行物を3冊とりあげたい。

吾妻重二編著『文化交渉学のパースペクティブーICIS国際シンポジウム論文集一』（関西大学出版部）は、関西大学が取り組んでいる「文化交渉学」研究の成果である。「文化は交渉する」「文化は越境する」という視点のもとに諸文化の形成や展開、受容や変容をとらえようとするもので、直接的には、2015年7月に開催された国際シンポジウムの発表論文が中心となっている。全体は、「文化交渉学と言語接触研究」「東アジア圏における伝統と近代化」「泊園書院研究」「文化交渉と東アジアの宗教・思想」の4部計16本の論文からなる。「言語接触」に関する諸論考は、文化交渉（接触・受容・衝突）によって、新たな語彙・文体が創出されたり変容を余儀なくされたりする状況を明らかにする。また、泊園書院研究の2本は、同じ大阪の漢学塾「懐徳堂」との関係でも注目され、思想・宗教の諸論考は、文献読解にはとどまらない文化交渉史研究の具体的手法を教えてくれる。

池田知久・水口拓寿編『中国伝統社会における術数と思想』（汲古書院）は、2015年5月に東方学会国際東方学者会議として開催された国際シンポジウム「中国古代における術数と思想」の成果7本をまとめた論文集である。全体は、殷周～戦国・秦漢、前漢末～後漢初、三国～宋元、北宋・南宋、明清、日本という分担と連続性のもとに編纂されており、通時代的に、また日本も視野に入れて「術数」を捉えようとした労作である。この内、李零「説術数革命」、工藤元男「郡県少吏と術数—「日書」からみえてきたもの—」、近藤浩之「周縁文化より考える占トの技術と文化」などは新出土資料を積極的に活用するもので、術数研究が新資料の発見によって活性化している状況が分かる。なお、本書に対する書評として、堀池信夫「新たな術数研究へのファンファーレ」（『東方』第436号、2017年）がある。

伊東貴之編『「心身／身心」と環境の哲学—東アジアの伝統思想を媒介に考える—』（汲古書院）は、国際日本文化研究センターの4年間にわたる共同研究の成果をまとめた論文集である。全体は、第一部「東アジアの伝統的な諸概念とその再検討の試み」、第二部「心と身体、環境の哲学—東アジアから考える—」、第三部「思想・宗教・文化がつながる／むすぶ東アジア」から成り、収録された論考は計37本、800頁を超える大冊である。標題との関係で特に注目されるのは、第二部の諸論考であり、例えば、西澤治彦「拝跪の誕生とその変遷」は、文字資料のみからでは理解しづらい「座法」について、画像石資料等も活用しながら具体的に論ずる。こうした考察が、「座」以外の身体表象に拡大しつつ、東アジア全般に及んで行けば、重要な文化史研究の成果となるであろう。

次に、「孝」に関する業績を二つ。宇野瑞木『孝の風景 説話表象文化論序説』（勉誠出版）は、主として中国・日本の前近代までを対象とし、「孝子伝」「二十四孝」などの説話に反映された「孝」の思想を考察する。その際、説話に関するイメージ、音声、身振り、儀礼といった諸現象に注目し、従来、思想、文学、美術という枠組みで個別的に扱われてきた資料を等価値的に取り上げる。「表象文化論」と題するゆえんである。

これと対照的なのが、文献研究に主軸を置く佐野大介『「孝」の研究—孝経注釈と孝行譚との分析』（研文出版）である。「孝」とは何か（本質的理解）、「孝」はなぜ衰えないのか（存続の理由）、「孝」はなぜ良いとされるのか（規範性の根拠）を追究するために、まず自覚的に記述された思惟・解釈に関する研究として、第一部『「孝経」注釈に関する研究』を進め、第二部以降では、無自覚的孝解釈に関する資料横断的研究を行う。特に第二部「「孝」と「不孝」との間」は、上記の『孝の風景』が取り上げていない問題を分析し、第三部「「孝」と血縁性との関係」も、理論的研究として大いに注目される。この両書は、「孝」が中国哲学の重要なテーマであり続けていることを改めて教えてくれる。

黄俊傑著、工藤卓司監訳、池田辰彰・前川正名訳『儒家思想と中国歴史思惟』（風響社）は、台湾大学教授黄俊傑氏の著書『儒家思想與中國歷史思惟』（台湾大学出版中心、2014年）の全文邦訳である。まず序論で、中国の「歴史思惟」（原著・訳書の表現で、「歴史についての考え方」という意味）に見られる儒家的要素として、(1) 古によ

って今を批判し、古を今に用いようとする点、(2) 特殊事例から普遍性を導き出す点、(3) 「事実判断」と「価値判断」を融合している点をあげ、以下、こうした認識を背景に、第一部「中国歴史思惟の核心とその現れ」、第二部「儒家思想と中国歴史思惟の展開」、第三部「中国歴史思惟の近代的転化」の本論が展開される。結論の一つとして提示される、中国歴史叙述の中での「理」と「事」とは不可分の関係であるとともに相互に緊張関係に置かれているという指摘は重要である。この邦訳が、現在、台湾で活躍する3人の日本人研究者によってなされたという点も、学术交流の観点から高く評価される。

総記の最後として、湯浅邦弘編著『テーマで読み解く中国の文化』（ミネルヴァ書房）を取り上げておく。中国哲学や中国文学といった伝統的枠組みでの大学教育が徐々に困難となってきた昨今、新たに注目されつつあるのは、「文化」であろう。本書では、「世界遺産」「漢字」「書籍」「学問」「文学と絵画」「故事と歴史」など14のテーマ（章）を設定し、中国文化を多様な視点から概説する。

先秦・秦漢では、まず、新出土資料研究に関するものとして、中国古算書研究会編『岳麓書院藏秦簡『数』訳注—秦漢出土古算書訳注叢書(2)一』（朋友書店）と、陳偉著、湯浅邦弘監訳、草野友子・曹方向訳『竹簡学入門—楚簡冊を中心として』（東方書店）がある。前者は、2007年に湖南大学岳麓書院が緊急購入した、いわゆる「岳麓秦簡」の内、『数』を取り上げ、張替俊夫氏、大川俊隆氏らを中心とする研究会が邦訳したもの。張家山漢簡『算数書』研究会編『漢簡『算数書』中国最古の数学書』（2006年、朋友書店）に続く労作である。後者は、武漢大学教授陳偉氏の『楚簡冊概論』（湖北教育出版社、2012年）の邦訳で、楚簡の基礎知識、竹簡発見の歴史、整理と解説の状況などを概説する。いずれも、出土資料研究の活況を示す著作である。

また、この時代の研究での大きな出来事として、渡邊義浩ほか編『全譯後漢書 第十八冊列傳(八)』（汲古書院）、同『別冊(後漢書研究便覧)』の刊行がある。2001年から刊行が続けられてきた同シリーズがこれにより完結した。快挙と言うほかはない。別冊には、後漢年表、官爵辞典、引用書籍・作品解説、人物辞典を載せる。

その他、訳注では、矢羽野隆男『大学・中庸』（角川ソフィア文庫）、井波律子『完訳論語』（岩波書店）がある。前者は、朱熹注を基盤とし、思想史的・文化史的観点からの興味深いコラムをはさみながら平易に口訳・解説する。後者は、『論語』の特に文章面についての解説が優れている。ただ、「完訳」という書名を持ちながら、古来難解とされてきた箇所については特に見解が示されないこともある。また、影山輝國『『論語』と孔子の生涯』（中央公論新社）は、『論語義疏』を軸とした概説書で注目されるが、本欄担当の阪大関係者としては、武内義雄校訂懷徳堂本『論語義疏』についても詳しく論じていただきたいところであった。（湯浅邦弘）

二、魏晋南北朝・隋唐

魏晋南北朝、隋唐それぞれの時代に関する単行本が少なかったこともあり、当該年も前年と同じく両時代をまとめて記す。なお仏教分野については、本欄執筆者にその方面

の素養を欠くため取り上げられなかったことをまずお詫びしたい。

渡邊義浩『三国志よりみた邪馬臺國—国際関係と文化を中心として—』（汲古書院）は、三国時代の国際関係と曹魏国内の政治状況、および陳寿に代表される史家の世界観を踏まえた上で、魏志倭人伝を『三国志』の一部として解説したものである。序章・終章を含め全2篇12章に、附篇として「魏志倭人傳譯注」を附す。贅言するまでもないが、邪馬台国の所在に関しては、現在も大和説・九州説の二説が対立し、いわゆる邪馬台国論争の最大にして最重要の論点となっている。この点に関しては、著者自身が「考古学者ではない」ことから、「文献学的に論証し得る、邪馬臺國は北九州には存在しない、という見解」（あとがき）に留めている。

本書では、「史書に偏向が含まれる」ことを前提に、内・外的史料批判に基づき史料の解説が進められる。第一篇「三国時代の国際関係と魏志倭人傳」は、後漢の民族政策の二類型を論じた第一・第二章、曹魏の異民族政策が諸葛亮への対応を契機に変貌していくことを論じた第三章、蜀漢・孫呉の国際秩序を論じた第四・第五章と、それらの国際関係を踏まえたうえで、倭人伝がどのように偏向して描かれたのかを論じた第六章とより成り、三国時代の国際関係と倭人伝の偏向とが明らかにされる。第二篇「魏志倭人傳の世界観と三國・西晉時代の文化」では、倭人伝の偏向を論じた第七章、経学の規定性の強さを論じた第八章、『三国志』が隠匿した孫呉の正統性を石刻資料から解明した第九章、張華『博物志』の世界観における異民族蔑視を論じた第十章を通じて、『三国志』の偏向の原因と倭人伝以外の事例とが明らかにされる。

本書は、『三國政權の構造と「名士」』（汲古書院、2004年）に続く渡邊氏2冊目の三国時代に関する研究書である。前書において三国時代の国家と社会とのあり方が、本書において三国時代の国際関係と文化とのあり方が明らかにされており、ここに三国時代に関して複合的な視点からの考察が成立したといえよう。

次に、隋唐時代を扱った著書としては、砂山稔『赤壁と碧城—唐宋の文人と道教—』（汲古書院）がある。本書は、砂山氏の前著『隋唐道教思想史研究』（平河出版社、1990年）から25年間の主要な論考をまとめたもので、第一部「唐代の文人と道教」（序章を合わせて全12章）、第二部「宋代の文人と道教」（序章を合わせて全9章）から成る。前著とのつながりを重視して、宋代ではなく隋唐の部で取り上げた。砂山氏は前著で、唐代の道教教派といえば茅山派ばかりが目される状況において、隋から初唐にかけて、道教修行者の何物にも執われない精神的な境地を重視した重玄派という教派が存在したことを主張した。前著の後、北宋時代の道教研究に転じ、唐宋八大家のうち欧陽脩・曾鞏・王安石・蘇洵・蘇軾・蘇轍の6名、および蘇軾・蘇轍の子孫文人と道教との関係を考察したのが本書の第二部である。一方、前著については、「隋・唐初期には天師道の道士の中に「重玄」を重んずる『道徳経』の解釈法が流行したと考えるのが妥当であり、これらの人々を特別に重玄派と呼ぶ必要はない」（小林正美『唐代の道教と天師道』知泉書館、2003年）といった批判もあった。本書第一部に収める一連の論考は、小林氏をはじめとするこうした批判を受け、前著の主張に補強を加えたものである。

本書第一部では、盛唐の玄宗期を軸にそれに近い重玄派をモダン（現代的）、東晋に

起源する茅山派をレトロ（復古調）とする新たな視点を設定し、玄宗の宮廷官僚であった王維はモダン、文学で復古主義を唱えた李白はレトロ、杜甫はその中間というように道教と関連づけ、道教史における重玄派と茅山派との相克を描き出す。「重玄」が盛唐の文人に広まっていた様子が示されるが、教派の存在に懐疑的な立場からはどう受け取られるのだろうか、更なる議論の深まりを期待する。その他、沈佺期・宋之間・韓愈・柳宗元・李商隠ら初唐から晩唐までの文人と道教との関係も考察されており、広く唐代から宋代にわたる文学と道教との関係をカバーする。氏は「中国文学研究について言えば、道教との関わりを論じることに広大な沃野が開けていると確信している」（本書第一部序章）と述べるが、本書所収の論考がそれを実践的に示している。また道教の女性観、道教の色彩学に関する論考も特色がある。ちなみに本書の書名は蘇軾の「赤壁の賦」と李商隠の詩「碧城」に基づく。

その他、訳注に関する単行本として、研究会での会読成果をまとめた二書が目される。

まず、六朝楽府の会編著『『隋書』音楽志訳注』（和泉書院）は、中国の正史の一つである『隋書』の音楽志の訳注書である。六朝楽府の会とは、もともと釜谷武志氏を代表とする科研費基盤研究「六朝の楽府と楽府詩」における研究会の名称であり、その活動の成果が『六朝の楽府と楽府詩』（科学研究費補助金研究成果報告書、2006年）として発表されている。本書は、その六朝楽府の会の新たな研究成果である『『隋書』音楽志訳注稿』（一）～（六）（『中国学研究論集』所収）をもとに、各担当者が、本文・現代日本語訳、及び語注に加筆・修正を施し、新たに書き下し文を附したものである。

正史における楽関係の記録は、『史記』楽書に始まり、『漢書』礼楽志・『宋書』楽志・『南齊書』楽志を経て、『隋書』音楽志へと続いている。中でも『隋書』音楽志は、先秦から隋に至る音楽史の大きな流れをふまえたもので、唐以前の音楽史を知る上で最良の資料といえる。近年、中国古典音楽に関する研究が盛んになっているが、本書は当該領域研究の発展の基盤となるものである。のみならず、東北アジア全体の古典音楽研究、さらには文学や文化史研究など、今後、多くの学問分野が本書の恩恵を受けることもまた確実であろう。

いま一つは、大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班（代表：中林史朗）による『藝文類聚（巻89）訓讀付索引』（大東文化大学東洋研究所）である。紹興年間宋刻本を底本とする汪紹楹校定の『藝文類聚』（上海古籍出版社、1982年）をテキストとし、その巻89について訓読、典拠の表示および本文の校異を施して索引を付す。かつ巻頭には解説の結果をもとに収録書や収録詩文についての分析をまとめた『『藝文類聚』（巻八十九）本文の構成について』を掲げる。

この『藝文類聚 訓讀付索引』は、大東文化大学東洋研究所の共同研究「日中文學の比較文學的研究—藝文類聚を中心として—」での会読の成果として、1989年10月に巻1が発行された。以後、毎年1巻ずつ刊行を続け、これまでに巻1天部～巻16儲宮部、巻80火部～巻89木部の計27巻、全100巻の約四分の一を解読している。かつて日本文学研究者からの要望で巻16から巻80へと転じたが、2017年は歴史研究者からの要

望に応じて巻45職官部に転じるという。代表的な類書である『藝文類聚』の精密な解説は、類書自体への数少ない研究として貴重である。かつ類書は当時の知を網羅的に集約した百科全書であるだけに、成果の恩恵の及ぶ領域も広い。長年にわたる地道な共同研究には頭が下がる。様々な困難もあろうが継続されることを望む。

(矢羽野隆男・佐野大介)

三、宋・金・元・明・清

当該年、朱熹の思想を扱ったものとして、宮下和大『朱熹修養論の研究』（麗澤大学出版会）がある。本書は、朱熹の修養が「格物窮理」と「居敬存養」とを二本柱にしている点をふまえ、朱熹の「知の修養」と「心の修養」とについてそれぞれ詳細な検討を加えた上で、修養という視座から朱熹の思想の再検討を行っている。宮下氏は、朱熹の修養上の一つのねらいがその欲望観にあることを明らかにするとともに、朱子学の中心的テーマにあたる「理」の思想もまた修養論を基盤として組み立てられている点を確認している。そして、朱熹の宇宙論、心性論、政治論、文学論など、いずれも修養の実効性や有効性を補足する形で模索されたものであるにもかかわらず、修養という視座を脇において朱熹の思想が語られることが少なくないことを指摘している。また、氏は、朱熹の修養論を再検討することで、朱熹の言説上に論理的な不整合が見られるのも、朱熹が個々の現実対応における実効性を重視した結果であるとしている。

宋明儒学を扱ったものとして、福田殖『宋元明の朱子学と陽明学』（研文出版）がある。本書は、福田氏の中国思想に関する論文集であり、冒頭には道学詩に関する論考が置かれ、以下、宋初三先生の淵源である范仲淹に始まり、朱熹の思想形成に多大な影響を与えた張栻、ともすればなおざりにされがちな元代の許衡や呉澄、明代思想の先駆者としての役割を果たした陳献章、王学右派に分類される聶豹や羅洪先などを取り上げ、宋代から明代までの思想の流れを一つ一つ丁寧に説得力をもって叙述している。

明代の朱子学に焦点を当てたものとして、細谷恵志『薛瑄と明代朱子学の研究』（明德出版社）がある。本書は、明代理学の開祖といわれる薛瑄を中心に、その理気論・心性論・修養論について詳しく検証している。細谷氏の研究の出発点は崎門学研究にあり、氏は朱子学を本来の姿に返そうと苦心した山崎闇斎が薛瑄・丘濬・胡居仁といった明代の朱子学者の言説を『文会筆録』に多く引いている点に注目している。また、氏は、薛瑄がその生涯において、純粹に朱子学を学び、自身が提唱した「復性」の具体的なあらわれとして、道徳的実践に努めた点を繰り返し強調している。

科举制度の変遷と明代思想の展開との関係性について論じたものとして、三浦秀一『科举と性理学 明代思想史新探』（研文出版）がある。三浦氏は、科举試験の模範解答をその時どきの政治的社会的状況を敏感に反映した貴重な史料であるとし、「性学策」の模範解答を精査するとともに、科举制度の実証的な分析を行うことで、当時の思想の実像を明らかにしている。氏によれば、三大全の登場により、受験生の答案は一定の水準に到達したが、その後、受験生には大全書の枠組みを越える「博学」や深い「自得」が求められるようになった。こうした理念は科举という場を通じて中国各地に伝播し、

「性学策」はやがて湛若水や王守仁の門人らの自己表現の場となり、その思想的研鑽は自得表現の理論的可能性を探究する方向へと傾斜し、嘉靖後期には、「性学策」は彼らの思想を普及させる媒体としての史的役割を担っていた。本書の書評として、早坂俊廣「書評 三浦秀一著『科挙と性理学 明代思想史新探』」(『集刊東洋学』第116号、2017年)がある。

宋代から清代に至る風水思想を採り上げたものとして、水口拓寿『儒学から見た風水 宋から清に至る言説史』(風響社)がある。本書は、宋代以降の風水思想の流行を受け、その「道徳と無関係な技術」の暴走を抑制するべく、風水思想に積極的な「矯正」を施し、「正しい儒教文化」の中に取り込もうとした儒教知識人たちの思想的営みについて論じている。その際、水口氏は、「正しい宇宙観」と「正しい礼教」という二つの指標を設け、当初は「正しい宇宙観」に合わず、「正しい礼教」にも有害なものと批判されていた風水思想に対し、その後の儒教知識人たちが、この二つの指標のいずれに重点を置き、またどのような方法で整合性を求めたかを分析し、最終的には、現代中国で編纂された族譜をその一つの帰結点として提示している。

当該年の清代思想関連書は、各研究者のこれまでの研究を継承・整理したものが中心となっている。まず木下鉄矢『清代学術と言語学 古音学の思想と系譜』(勉誠出版)を挙げておきたい。これは『清朝考証学』とその時代』(創文社、1996年)以前に書かれた氏の遺稿を再編成したものである。周知のように木下氏は、考証学が形而上学的なものを排した「自由なる生の息づかい」「経書の言葉の心をこめた個人化」という深い内実的な意味のある精神的活動であることを提示し、そのイメージを一変させた。

第1部では、皖派には、人間の音声そのものを追究しようとするグループ(江声・戴震)と、古典文献に拠り古典的音韻を究明しようとするグループ(段玉裁・王念孫)という二つの流れがあるとす。そして、本書の中心をなす第2部では、戴震・段玉裁師弟の音学に基づくテキストの繊細な読みの過程を検証・対比させ、前者の場合、ものの「本源」である言語をあくまで「本源」として知ることを目的としており、経書ですら単なるテキスト、すなわち手段以上のものではなかったのに対し、後者にとってテキストを「読む」ことは、己の身の内の感覚をもって対象に没入し、内側から把握することに他ならず、「読み」自体が自己目的化していたとして、その相違を明らかにする。そして、段玉裁にとっての「経学」が実は文字言語全般に隠されている「聖人の意」を読み解くことであり、必ずしも通常の意味での経書に限定されるものではないとし、これが畢生の大著『説文解字注』の述作にもつながっていったと結論付けている。

また、清代思想を扱ったものとしては、大谷敏夫『清代の政治と思想』(朋友書店)が挙げられる。大谷氏は清代思想史全体を貫くものとして、考証学をも包括した「経世思想の展開」という概念を提起し、『清代政治思想史研究』(汲古書院、1991年)を初めとした数多くの成果を半世紀にわたり発表し続けており、本書でも清初から民国初に至る、長期間の経世思想の諸相が着実な考察とともに論じられている。また、後半部では清代経世思想の幕末日本への影響や内藤湖南の経世論にも筆が及んでいる。

訳注書としては、緒方賢一・白井順訳注『朱子語類』訳注 卷九十八 張子之書一・

卷九十九 張子書二・卷一百 邵子之書』(汲古書院)、鈴木利定、中田勝著『王陽明 徐愛「伝習録集評」』(明德出版社)、また清代思想史の重要資料である洪大容著、夫馬進訳『乾浄筆譚 1 朝鮮燕行使の北京筆談録』(平凡社東洋文庫)などが刊行されている。(久米裕子・横久保義洋)

四、近現代

当該年には中国近現代思想史の概説として、まことに画期的な書物が出現した。坂元ひろ子『中国近代の思想文化史』(岩波新書)である。本書では「初期グローバル化」という観点を以て、清末から中華人民共和国成立までの文化・思想の変遷を叙述している。新書という形式でこの時代の思想文化史を叙述することは恐らく初めての試みであり、しかも表面的な記述に終わることなく、その諸様相、とりわけジェンダーや優生思想を深く掘り下げて論じている。また、従来ともすれば新文化運動に対する単なる「反動」として軽く扱われていた文化保守派である『学衡』派について、「もう一つの五四文化が存在したともいえる」と正当な評価を下している。ただ、民国期の主要な学術思潮をほぼ漏れなく取り上げているにもかかわらず、『国粹学報』や近年注目を受けつつある『戦国策』派に触れていない点が惜しまれる。

民国期の学術状況については、高田時雄編『橋川時雄 民国期の學術界』(臨川書店)も出されている。本書は、かつて北京に在住し『文字同盟』の編輯者として日中の文化交流に尽力した橋川時雄氏の遺稿をまとめたもので、高い史料の価値を有する。

近現代仏教についても、日本との関係を踏まえた力作が相継いで刊行された。とりわけエリック・シッケタンツ『墮落と復興の近代中国仏教 日本仏教との邂逅とその歴史像の構築』(法蔵館)が挑戦的な議論を行っている。清末、多くの日本人旅行者が大陸に渡り当時の中国仏教と接触する機会を得たが、彼等が一様にそれを「墮落」「衰頹」の過程にあるものとして捉えたのは、凝然『八宗綱要』以来の日本仏教の「宗派」の枠組みを中国の仏教最盛期である隋唐代にも実在したものとみなした既成観念によるものである、と論ずる。そして日本仏教界の多大な影響下にあった近代中国人研究者も日本側の仏教史観をそのまま受け継ぐこととなり、民国期における密教(東密)の日本からの逆輸入・「復興」もその文脈でなされたのであると捉えねばならないとする。これまで中国近現代の仏教が日本と密接な関わりがあったことは指摘されてきたが、それによりもたらされた具体的な「歪み」については明らかにされてこなかった。本書ではポスト・コロニアリズムの視点が導入されており、その結論に対しても賛否が分かれるところであろうが、今後さらに論議されることを期待したい。

当該年にも近現代の様々な思想家の評伝が出されている。その中でも狭間直樹『梁啓超 東アジア文明史の転換』(岩波現代全書)を特に取り上げたい。狭間氏は長らく日本における梁啓超研究を主導してきたが、本書では彼が日本において言論活動を展開していた時期を中心として、その政治・啓蒙活動が日本の学術動向を反映しつつ展開されていったことについて詳細に叙述がなされている。また、彼の師である康有為との微妙な関係についても触れられており、氏の数十年にわたる研究成果が本書に凝縮されている

といっても過言ではない。本書の他に、民国期を中心とした教育思想家 14 名に対する論考である小林善文『中国の教育救国』（汲古書院）も見逃せない。

訳注書としては、近年、日中双方で再評価を受けている陳独秀の著を集めた長堀祐造・小川利康・小野寺史郎・竹元規人編訳『陳独秀文集 1 初期思想・文化言語論集』（平凡社東洋文庫）、石川禎浩・三好伸清編訳『陳独秀文集 2 政治論集 1 1921-1929』（同上）がある。また汪暉著、丸川哲史訳『世界史の中の世界 文明の対話、政治の終焉、システムを越えた社会』（青土社）も刊行された。前年に引き続き活躍中の現代中国の思想家の著作の訳述、紹介が精力的に試みられていることは、今後の中国哲学研究のあり方を模索する上において、はかり知れない意義を持つものであろう。

（横久保義洋）

五、日本・琉球・朝鮮・書誌

当該年は、琉球に関する著作がなく、日本・朝鮮・書誌を対象とする。

まず、日本関係の著作を紹介する。竹村英二『江戸後期儒者のフィロロギー 原典批判の諸相とその国際比較』（思文閣出版）は、18 世紀から 19 世紀中葉頃までの、日本の儒者が行った中国古典テキストの文献・書誌研究について考察し、その客観性と実証性とを備えた学問が、世界的に見ても希有なものであったと論ずる。本書は、日本の実証的学問が、清朝考証学と西洋の学問とを基に形成されていったという従来位置づけを再考すべきと主張する刺激的な研究である。本書で最も注目されるのは、その方法論である。たとえば、「各論編 I」第二章では、懐徳堂学派の儒者・中井履軒の『尚書』注釈を取り上げ、その客観的な原典批判を高く評価する。

井上哲次郎以来、近世日本の思想研究は、近代の萌芽となるもの（山片蟠桃など）を見出そうとする性格が強かった。そのため、朱子学派の経書注釈が俎上に載せられることは、ほとんどなかった。ただ、中井履軒の『尚書』批判が、宋明の学者の『尚書』研究を発展的に継承したものという位置づけは再検討の必要があるだろう。履軒に直接影響を与えた五井蘭洲や、三宅石庵の中庸錯簡説等をも視野に入れて論じるべきだったのではないか。

高山大毅『近世日本の「礼楽」と「修辞」 荻生徂徠以後の「接人」の制度構想』（東京大学出版会）は、荻生徂徠および徂徠の影響を受けた学者達の、「礼楽」論と「修辞」論を主たる考察対象としたものである。第一部「礼楽」が思想史研究であり、続く第二部「修辞」は一転して文学研究であるという、従来の日本思想史・近世日本文学といった枠組みにこだわらない点がまず目を引く。ただし、この視点は決して奇をてらったものではなく、古文辞学派の儒者達が、君子は行動では「礼楽」に従い、言語では「辞」を修めるべきものと考えていたことによるものである。

従来の古学派の研究は、ともすれば朱子学との相違を論じたり、古学派の独自性を見出したりする方向に向かいがちであるが、本書は徂徠とその後継者達が、「礼楽」の構築と「修辞」の洗練によって、温雅な「接人」（交際）を実現しようとしていたということに着目したものであり、その独自の視点は高く評価できる。徂徠の後継者といえば、

当然、太宰春台・服部南郭を中心とした論述が予想されるが、本書にはそれらの名はそれほど出てこない。重点的に扱われるのは、水足博泉・田中江南といった、従来、全く取り上げられることのなかった儒者達である。彼らを見出したことは、本研究の大きな成果である。
(寺門日出男)

また、「礼楽」の関係では、吾妻重二編『家礼文献集成 日本篇 五』、『家礼文献集成 日本篇 六』(関西大学出版部)が相次いで刊行された。これらは2010年から刊行されているシリーズの一環で、日本における朱熹『文公家礼』の関係文献を影印したものである。『文公家礼』は儒教儀礼の代表的な手引書で、その研究は重要であるにもかかわらず、従来、看過されがちだった。今後、哲学方面のみならず儀礼や文学等、多角的な観点から朱子学が研究されてゆくだろうが、本書の刊行を契機に朱子学の儀礼研究がよりいっそう進展すると予想される。

続いて前田勉『江戸教育思想史研究』(思文閣出版)を取り上げる。本書は、これまでの教育思想史研究で検討不十分だった、近世日本と明治初期との教育・教化の関連の解明を目的としている。前田氏は基本的に近世と近代とは連続するとの立場であり、近代国民国家にふさわしい国民の形成をめざしていた明治政府が、近世日本の藩国家に有用な英才「教育」と庶民への道徳的教化との両側面を受け継いで、近代国家に有用な人材の教育と道徳的教化との二つの側面を重視していたと述べる。ただし、学習方法については近世と近代とで断絶している側面もあり、近代日本は近世に存在した自発的な共同学習の場である会読の場を否定したとする。しかし、会読のような自発的学習方法は現代において再評価されるべきだと氏は提言する。氏は日本思想史学の碩学で、本学会で日本漢学を専門とする研究者にもその著書はよく読まれていると思うが、日本思想史学と中国学との間の交流が現状で十分にはかられているとはいえない。今後、両分野間のいっそうの交流が望まれる。

次に湯浅邦弘編著『増補改訂版 懐徳堂事典』(大阪大学出版会)を取り上げる。本書は江戸時代の大坂に存した漢学塾懐徳堂に関する情報を網羅した事典で、2001年刊行の初版をベースとしつつ、その後に進展した重建懐徳堂期の研究成果等を反映したうえで項目数を増やした増補改訂版である。懐徳堂の歴史に従って、懐徳堂の成立、経営と教育、学問等の八章にわたって解説している。懐徳堂の研究については、このような著述による研究成果の公開のみならず、「WEB 懐徳堂」に集約されるデジタルアーカイブ事業も注目できる。「国立国会図書館デジタルコレクション」に代表されるように、資料のデジタル化は必須の流れであり、今後もさまざまな形でこの流れが継続してゆくだろう。

最後に、一般書だが、嘉数次人『天文学者たちの江戸時代一暦・宇宙観の大転換』(ちくま新書)を取り上げる。本書は日本の天文学の転換期となった江戸時代に焦点を当て、天文学の進展の様相を紹介する。江戸時代の天文学は、古代からの伝統的な知識に、西洋から新しく将来された知識を取り入れて格段に発展した。具体的に伝統的知識とは中国天文学で、その特徴は支配者のための学問だった点にある。その中国天文学の知識ののっとなって日本独自の暦である貞享暦を初めて作った渋川春海は、西洋天文学の

知識を記した『天経或問』を知って徐々に新知識に目覚める。その後、徳川吉宗期の麻田剛立、その高弟だった高橋至時や間重富ら以降、西洋天文学の知識が日本に流入し、幕末に至るまで江戸期天文学が発展してゆく様相が描かれる。

天文学などの科学技術史に関する研究は、後に取り上げる書誌学も同様だが、日本思想史や中国思想史で取り上げられることは決して多くはない。しかし、それらの分野の研究が重要であることは言を俟たない。今後、より多く研究対象になって然るべきだろう。

朝鮮については、まず、韓亨祚（韓国学中央研究院教授）著、片岡龍監修、朴福美訳『朝鮮儒学の巨匠たち』（春風社）を取り上げる。本書は2008年に韓国で出版されたものの翻訳で、朝鮮儒学史において著名な李栗谷、李退溪、曹南冥らを取り上げて、彼らの思想の梗概を描く。監修者の片岡氏によれば、韓氏は古典漢学のみならず哲学も専攻しているとのことで、ハイデガーやデリタなど西洋の哲学者も引き合いに出しつつ、独自の軽妙な記述で彼らの思想を紹介する。本書は決して体系的な朝鮮儒学史の書ではないが、氏の「日本語版への序言」にもあるように、儒学を混沌の時代に生きるための“生の技術”ととらえる点にその特色があり、その点は我々思想史研究者も軽視すべきではない。片岡氏も、生きる技術として哲学する道を日本にも切り開くことが本書を日本で出版する意義だと述べる。確かに中国学を専攻する我々にとっても philosophy と philology との両立は永遠のテーマであり、儒学を生きる技術ととらえる本書の立場は、我々思想史研究者に対して自身の立場への再考を改めて迫るものとなっている。

次に李暁辰『京城帝国大学の韓国儒教研究「近代知」の形成と展開』（勉誠出版）を取り上げる。本書は1926年に開学した京城帝国大学における韓国儒教研究の様相を解明しようとするものである。特に第二部「学術篇」においては韓国儒教研究の中心的存在だった3名の研究者について論じている。まず、韓国儒教史を「主理派・主気派」の概念でとらえた高橋亨、次に朝鮮時代の儒学者と清朝考証学者との交渉の中心人物である金正喜の研究を進めた藤塚郷、そして、李退溪の研究を進めた阿部吉雄である。そのうえで韓国の伝統的漢学の立場と日本の近代学問としての儒教概念とが乖離している様相を分析し、京城帝国大学の韓国儒教研究が、その後の韓国側研究者による韓国儒教の意義と特色の究明につながっていったとする。

上述の韓亨祚同著と併せて述べるならば、本来、朝鮮儒学（李暁辰同著では「韓国儒教」と表記される）は理気説などの形而上学的論争のみにとらわれない自由な思想史的発想を有していたが、京城帝国大学期の研究者によって、一定の枠組みに朝鮮儒学が規定されてしまった。その枠組みから、現在の我々もまだ脱しきれていないともいえる。今後、中国学以外の分野の研究者とよりいっそう交流機会をもつことで、我々自身の研究態度を今一度反省する必要があるかもしれない。

また、福田殖『日本と朝鮮の朱子学』（研文出版）も刊行された。本書は、日本と朝鮮における朱子学に関する福田氏の論文集であり、朝鮮の李退溪や日本の楠本端山に関する論考を収めている。さらに、福田氏の元勤務校九州大学の岡田武彦、荒木見悟両碩学の学問の梗概も紹介されており、九州大学における中国近世儒学思想研究の伝統をう

かがうことができる。

書誌については、高橋智『海を渡ってきた漢籍 江戸の書誌学入門』（日外アソシエーツ）を取り上げる。本書は漢籍書誌学を専門とする高橋氏が、江戸時代に存在した漢籍の扱いについて一般読者向けに紹介した書である。豊富な図版を使用して版本の相違を説明しており、非常にわかりやすい内容になっている。貴重な版本の研究のみならず、ごく普通に流通していた版本の研究がかえって当時の漢文文化の様相を知ることにつながるという指摘は有意義である。氏によれば、今も日本の公共図書館や大学図書館に江戸時代の古典籍が多く所蔵されているが、漢文文化が廃れてしまった現在、それらの古典籍が有効に利用されているとはいいがたい状況である。また、各地の漢文文化の拠点だった藩校が閉鎖されてその蔵書が散逸した影響で、蔵書収集の意図が不明になり、印記をたよりに類推する等の方法しかないとのことである。このような状況の中で長澤規矩也以来の書誌学の伝統を継ぐという意味において、本書は良きレファレンス書になっている。中国文献学を中心に執筆された氏の『書誌学のすすめ 中国の愛書文化に学ぶ』（東方書店、2010年）も併せて読まれることをお勧めする。（藤居岳人）

◎文 学

はじめに

学界展望（文学）は、今後2年間にわたり、京都大学文学研究科中国語学中国文学研究室（代表：緑川英樹）が担当する。本稿で対象とするのは2016年1～12月に日本国内で刊行された中国文学の研究論著であり、学会ホームページ上に「単行本」と「論文」に分けて文献目録を掲載した。データ収集と入力作業については、中文研究室の山本浩史（教務補佐員）、楊維公（博士後期課程）両君の手を煩わした。ここに記して謝意を表す。

文献目録の分類は、以下のとおり。

1. 総記
2. 先秦
3. 漢・魏・晋・南北朝
4. 隋・唐・五代
5. 宋
6. 金・元・明
7. 清
8. 近現代
9. 日本漢文学
10. 比較文学
11. 書誌学
12. その他

従来は、「近現代」の次に「民間文学・習俗」の項目があったが、分類基準の曖昧さや刊行点数の少なさを考慮してこれを廃し、新たに「その他」を設けた。この改変には賛否両論あろうかと思うが、狭義の「文学」以外にも、歴史・音楽・美術・民俗など隣接領域の関連論著をなるべく幅広く収録することを意図したものである。ただし、映画やアニメーションなどの映像メディア、話劇などの舞台芸術に関する論著は、通例を踏襲して「近現代」の項目に入れた。いわゆる視覚文化やポップカルチャーに属するものが近現代文学と混在した状態となっているが、さりとて「その他」が肥大化するのも好ましくなく、今後、あるいは別の新たな分類方法を模索すべきかもしれない。

近年の中国文学研究は、専門がますます細分化してゆく一方で、複数の異なる学問領域に跨がり、相互にクロスオーバーするような成果も徐々に現れている。かくも広大か